農的社会をひらく

～自然農法国際研究開発センターへの期待も含めて～

農的社会デザイン研究所
代表　蔦谷 栄一

農水省が定める有機農業の推進のための基本方針が2007年に策定され、その見直しによる新たな第2期基本方針が2013年に策定された。そのとりまとめのため農政審議会企画部会の中に「有機農業の推進に関する小委員会」が設けられ、座長を農林中金総合研究所特別理事（当時）の蔦谷栄一氏が務めた。蔦谷氏は、自ら山梨で野菜を栽培するなど農的暮らしを楽しむ生産消費者として農的社会を拡げ、地域に根付かせようと活動を続けている。

（公財）自然農法センターは2015年に設立30周年を迎え、次の時代を見据え新たな公益事業展開が求められている。そこで、蔦谷氏を講師に招き、氏が執筆し、最も注力している『農的社会をひらく』（創森社刊2016年）をテーマに、昨年12月に職員向けセミナーを開催した。有機農業への深い造詣はいうまでもなく、多方面にわたるお話の中から、その一部をダイジェストでお届けする。

はじめに

私は研究者としていくつもの論文を世に問うてきた。でもやり方は、普通の人とは全て逆の途をたどってきた。研究テーマは自分の専門とか得意分野ではなく、いろんな状況で研究者が現れず、現場がどうしようもなくなって必然的にやらざるを得なくなって、研究に取り組み始めたものばかりだった。また、普通はオーソドックスに体系から入っていく研究者が多いが、私は問題となっている目先のものに取り組んでいるうちに、あとから体系ができてきたという感じがほとんど。だから普通の学者、研究者とは理解の仕方が異なるところも多い。もちろん師匠もいない。

例えば、都市農業振興基本法は2015年4月に法律ができたが、都市政党である公明党が自民党とは独自の政策路線として、都市農地を守るという形で農業戦略をたてた。1968年にできた都市計画法で都市部、市街化区域にある農地を農水省（当時農林省）が国交省（当時建設省）に嫁入りさせている。それでもそこで、歯を食いしばってやってきた農家がある。生産緑地法ができて、一応、農地と同じ扱いの課税で農業を継続できるようになったが、10年以内に宅地に転換することを前提にした農地と位置づけられていた。バブルがはじけて世の中が大きく変わり、都市農業の見方も変わってきた。そういった状況の中で、都市農業に関する研究をやろうとする研究者や学者がいないので、公明党から私のところに依頼がきて、現場のニーズがあるなら面白いテーマだと考えて研究を始めた。

飼料米についても1999年に食料・農業・農村基本法ができて、食料自給率目標の設定を法律で決めた。決めるのはいいけど、どうやって自給率を上げていくのか、法律

を決めた際には具体的な議論がまったくなかった。方針もなくて気持ちだけ明記した目標をつくるなんて。腹が立ったが、色々と具体的に考えて、農林金融という雑誌に水田の畜産的利用が必要だと書いたら、国会で火がついた。途端に「農林中金がなぜこんなことをいうんだ」と全中の役員から怒られた。一方、国会から全中に「農協系統ではどうする？　実態はどうなんだ」と呼び出しが来た。全中には担当がおらず、けしからんと叱った相手から今度は「蔦谷君、悪いけど国会へ行って話してくれ」となって表舞台に出ることになった。

農林中金総合研究所で18年、常務が終わってから特別理事という肩書きをもらって研究に専念した。研究員とは離れた部屋で独自に仕事をしていた。自分の後継者もつくりたかったが、研究所での研究の仕事は自分一代で終わっている。でも、ありがたいことに世の中にはたくさんの弟子ができている。今まで、銀座では社会人を中心に5期にわたって農業政策塾を開いてきた。私の意図は、知識としての農業政策ではなく、自分も農業に参画する、皆になんらかの形で農業に関わって欲しいということ。これまで延べ100人位の普通の人が参加してきた。中心は30～40代のサラリーマン。午後7時から始めて講義が終わるのは9時すぎ。それから懇親会で、終わるのはいつも12時前後。みんな非常に熱心。ビジネスに限界がきた。新しいビジネスには農の世界を知らなきゃいけない。それが半分位。半分は半農半Xがしたい人。塾生の中からサラリーマンをやめる人が出てきた。直接農業をやる形ではなくて、できた農産物を店頭に置いて販売する。地域と生産者をつなぐNPO的活動と、産直売り場をミックスしてやり始めた人。市民農園を始めた人もいる。

私が「農的社会デザイン研究所」を立ち上げた理由の説明はちょっと難しい。農業問題についての整理は個人的には既に終わったと思っている。その後、何をやっていく

のか。農業というのは産業以上の大事なことを含んでいるじゃないか。あえていえば人間の幸せ。そのためには生命原理を優先していく。それが、農的社会という概念で整理できるのではないか。そして塾生の中で共鳴した若い人、自分たちで事業を始めた人、起業した人にファンドして応援していこうと出資を始めた。若い人たちを後押ししていく。「社会デザイン」の本当の意味は「レボリューション（革命）」を表している。人の心の中に新しい生き方としての革命を起こしたい。

農業の危機は現代社会の危機を象徴

(1) 構造問題が分かりやすい農業

農業というのは土と太陽と水。つまり人工物でない自然の恵みがあって初めて成り立つ。いわゆる工業とは違う。TPPで農業がなぜ問題になるのか。農業以外の方が逆に危険だが、工業はさらに自然の恵みとの関連が薄いという意味でがんじがらめになり、TPPを前にしても構造の危機が感じられにくくなっている。むしろ農業は構造の危機が見えてくる。今、食べ物でなく食料として農産物が扱われている。百姓仕事がなくなって、労働になってきている。さらに言えば、昔の百姓仕事がIoT化（インターネットの作業機）だとか、マニュアルに置き換わって自然からの乖離がある。農業が変わってきていると、感覚で分かる。構造が変わってきたのが農業だからまだ判る。

(2) 経済至上主義の加速と贈与世界の喪失

すでに成長の限界は誰もが認めている。しかし、誰もが自分の時代は成長を続けたい。リーマンショックで経済社会は破綻した。結局は元にもどった。政府自体が世界中に売り込み合戦をするという、より矛盾を深めるという形でしか活動できていない。仕切り直してもまた永くは続かないことがわかっている。そういう世界になってきている。成長の限界が見えているのに変えられない。いきなり変えられないなら、少しずつ新しい芽を出していかなければならない。

何が問題か。それは自然から乖離してしまったこと。人間は自然の中で感性が育まれてきた。それがなくなって経験・体験から離れ、バーチャルに置き換えられてしまう。机上で考え、精緻に進めば良いという考えになった。人間が自然を支配するという構造に陥っている。人間が自然をコントロールすれば、人間が人間でなくなる。人間が自然から疎外される。自然からの乖離を加速する、それが近代化であり、資本主義である。資本主義、それ自体は悪いとは言えない。ただバランス、スピード・発展が人間の速度を超えてはいけない。あるいは資源は有限だ、循環が根底にある。そういう制約の中で、近代化、資本主義の進展をはかる。近代化を否定しないが、ただ人間のおごりが隠されている。資本主義というのは、一旦入ると、逃れられないやっかいな仕組み。逆の循環がある。

資本主義の次の世界のイメージが必要だが、あまり提案されていない。私は資本主義はある程度残りながらも、「贈与の経済」、マネーで換算する以外の世界を膨らませていく、そういう社会を増やしていくイメージを持っている。農業問題をしっかり整理することで、次の社会のビジョンなり、方向付けが見えてくるのではないかと主張している。

＜農業の危機＞
低食料自給率、担い手不足、低収益性、農村の活力低下
＜農政の動き＞
攻めの農業、農業改革、農協改革、TPP
＜現代社会の構造＞
分業、効率化、市場化、自由化、グローバル化、マネー主義、格差拡大、過剰管理―成長の限界、見出し難い働くことの意義、コミュニティの喪失
＜その本質＞
自然からの乖離、人間中心と人間疎外、近代化・資本主義という自動作用
＜根底にあるもの＞
ないがしろにされている循環＝生命

図１　「農業」と「農」の関係
〔資料：蔦谷栄一作成〕

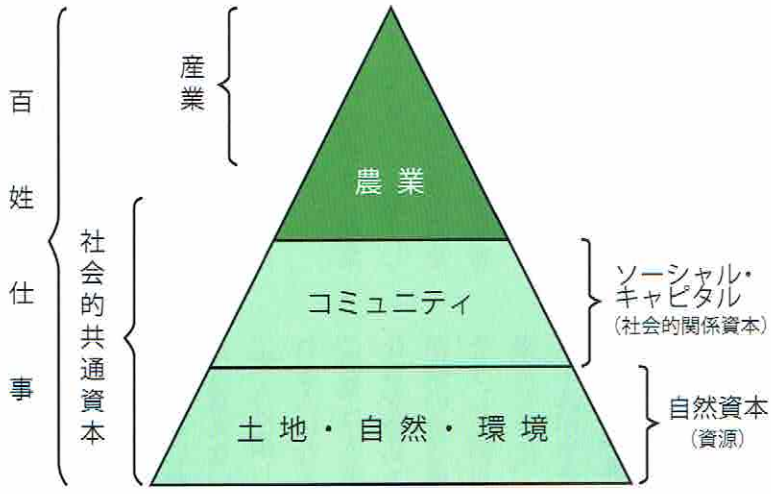


図２　農業ーコミュニティー自然の関係性
〔資料：蔦谷栄一作成〕

不可避な農業と農の関係・位置づけの明確化

(1) 産業としての農業、生業（なりわい）としての農―農あってこそ成立可能な農業

問題となるのは農業が産業としてしか論議されていないこと。ＴＰＰの議論が典型で、要するに高いか安いか、面積が広いか狭いか、効率主義でしか語られていない。基本的に、図１の二重の円で示したように「農」という世界と、「農業」の世界を区分して考える。「農業」は産業として理解し、この周りに生業―生産から暮らしまで―を含んだ「農」の世界があると、分けて考えた方が良い。図１は上から見た図、図２はヨコから見て縦に切った三角形の図になる。一番上、産業としての農業が成り立つ為にはコミュニティが要る。特に水田稲作をやっている地域は村落共同体があって初めて可能になった。産業を支えていく人的集団、集まりが、当然、必要になってくる。その下に、さらに、土地なり自然なり環境が存在している。こうした「農」の世界全体の中に、農業が位置づけられる。

しかし今、農業政策、あるいは学者の世界を含め、農業問題は一番上の産業としての農業しか議論されていない。本当は下にあるコミュニティなり土地なり自然・環境、こういったものの上に乗っかっているが、重なっているがゆえに、農業が成り立っているという認識がまったくない。やっと多面的機能という言葉で、農業を支える世界へのまなざしという視点が出てきただけだ。

(2) 後世に残すべきは農の世界

全ての産業のベースにある「社会的共通資本」。これは東大・経済学部教授、故宇沢弘文さんの主張した概念。元々、宇沢さんが傾倒したアメリカの経済学者ソースティン・ヴェブレンの言い出した「制度主義」を詰めて宇沢さんの言葉で表現したもの。どんなに世の中が変わっても、資本主義が進んでも、絶対に資本家が手を付けてはいけない制度資本。人類が共通して、みんなで共有する資本、これを社会的共通資本といっている。具体的には病院とか、教育とか、交通とかが挙げられるが、わたしはその中の一つとして、農の世界が持っている多面的機能も含め、コミュニティなり、土地なり自然なり、環境なりが、社会的共通資本の柱の一つだということを、理解すべきだと思う。むしろ、私は社会的共通資本の中に産業だけの農業ではない農の世界も、はっきり位置づけるべきだと思う。

(3) 農＝仕事（Work）、農業＝労働（Labor）

産業としての農業をやるのがプロ農業であって、周りの生業、農の世界を兼業農家にとどまらずいろんな人が、都市住民を含めて国民全体が農の世界に関係していく、あるいは参加していくのが一つの方向性だと思う。今の産業として農業をやっている農家の人たちにとって、農業は労働

(Labor) なんだ。労働力を商品として売って、見返りに賃金をもらうという風に今の農業がなってきている。だから農業をやって収入がいくらでコストをいくらと計算し、競争力が無ければ規模拡大とか海外移転とかを考える。

そういうプロ農家は「農業がおもしろくない」。成功した人にはいろいろな考え方を持つ人もあるが、プロ農業者でまず農業が面白いという人はいない。ところが素人がやるとおもしろいし、楽しい。それを農家の人はけしからんという。どちらも事実だ。私がなぜ農業をやるのか。自分で山梨に27年前に400坪の竹藪を買って開墾した。実は私は草刈が大好き。野菜が日陰になる部分の草を刈っていく自然農法。30分やると、頭が真っ白になって、嫌なことが忘れられて、その瞬間、草刈で最高の幸せを感じる。その喜びを農業者を前に話をしたら、講演を終わって怒られた。俺たちがどんなに苦労しているのか、知らないだろうと。あえて反論はしなかったけど、その時、プロは可哀想だなと思った。経営が成り立たないと困る。汚いとか、きつい儲からない農業としか考えられないから後継者になれとは言えない。プロの農家は「素人は楽しいね」を受け入れる人になる。アマチュアは「農業は大変だね」とプロの仕事を認める人になる。これが僕の言う農的世界。農業がそうした相対的な位置づけに来たときに、農業が発展するベースができる。そういう意味で、農＝仕事（Work）にする。人間が幸せを感じるのは、やはりWorkなんだ。

これはある有名な話。島に大金持ちが行って、漁民が魚を釣っているのを見ている。1日中釣り糸を垂れて数匹しか捕れない。その釣りをみていた大金持ちが、横から

「可哀想だね。モーターボートを買って釣れば、沢山釣れるようになるよ。」

「釣れたらどうなるの？」

「そしたらお金が貯まるだろう。そのお金で大きな船を買って、養殖の筏（いかだ）を買って、そうしてもっと儲けることができるよ。」

「儲けたらどうするの？」

「世界中のものを集めて、楽な暮らしができるじゃないか。」

「それで、楽になったら、どうするの？」

「そしたら、1日釣りでもしながらのんびり暮らすかな。」

「じゃあ、今の僕と同じだね。」

世間は百姓仕事を遅れていると馬鹿にして、分解して、駄目にして（労働にして）経済原理をおしつけてきた。当たり前のことをやって幸せならそれでいい。百姓仕事の良さを認識すべき。農業の世界と、農の世界を分けて考える。農の世界を意識したときに、人間の本当の幸せが見えてくる。

日本農業の方向性

(1) 明治以来一貫して日本農業のモデルは欧米

海外から来た農業指導者は、日本人に伝えるべきものは伝えて10年前後で皆帰った。かろうじて北海道では使えるものがあったが、結局日本には根付かなかった。農業は太陽と土と水の恵みによって成り立つ。そうすると農業は国によって違い、地域によって違って当たり前。それが今、どこでもトウモロコシ、大豆、米をつくろうとしている。一貫して面積がメルクマール（目標・評価軸）になる。今平均して面積は日本が2・6ha、ヨーロッパの面積20～40ha。北海道がやっと近くなった。でもアメリカは200ha、ブラジルは2000ha。

アメリカ、ブラジルは車で1日2日かけて走っても風景が変わらない。ブラジルに行って訪れた農場は、見えるところすべてが農場の土地。そのオーナーは週に1度、ジェット機に乗ってやってくる。農場内に飛行場がある。今求めている農業の最先端、ベクトルはそっち。でも、これと勝負したら国を取られちゃう。欧米は畜産文化圏。土地から出てくるのはあらかた牧草。人間はそのままじゃ食えない。間接的に家畜に食わせて人間がいただく。そうすると広い面積がいる。牛1頭が1haで、家族経営だと10頭、必然的に10～20haが必要となる。

水田稲作というのは10aで10俵位とれちゃう、日本は水田で循環している、持続可能性がある。そういうものをベースにして日本農業があるべきだ。家族経営、自給的世界を考えれば、小さい面積で充分となる。日本型農業あるいは東アジア型農業というのを、これからの世界農業のモデルにしたい。

(2) 地域農業―多様な担い手による多様な農業の評価軸・日本農業の特質

日本は盆地、流域、凸凹が多い。それだけに地域性に富む。それぞれにみんな違う。あちこちに盆地があり、かな

日本農業の特質

①豊富な地域性・多様性
②極めて高い水準の農業技術
③高所得かつ完全・安心、健康に敏感な大量の消費者の存在
④都市と農村とのきわめて近い時間距離
⑤里地・里山、棚田等のすぐれた景観
⑥豊かな森と海、そして水の存在

（蔦谷栄一『日本農業のグランドデザイン』より。一部修正）

り個性的な風土をもっている。大農機具を入れるには傾斜が多く限界がある。今まではこうしたことから、日本農業は近代化が遅れたといわれる。これまでの欧米モデルを追従していくと、結局、アメリカでもEUでも、ブラジル・なりオーストラリアにヘゲモニー（支配集団による知的、道徳的、政治的な指導権を意味する）を奪われてしまう。その農業の違いを無視して、効率性だけで考えると日本の面積は小さく近代化が進んでいないと判断される。だから、今の農業改革はやればやるほど負ける。どんなに大規模化しても、200ha～2000haには叶わない。大面積にして大農機具を使っても水が枯渇するなど別の問題もでてくる。その世界に寄り添おうとしている今の農政とはまったく違う農政がありうる。それが地域農業だというのが私の考え方だ。

逆に、なぜああいう欧米型農業をやるのか。2000haの周りには人がいない、消費者がいないから広域流通せざるを得ない。広域流通は自ずと輸出にもつながってくる。でもやっと、ブラジルでも地産地消をやりはじめたところもある。サンパウロ郊外から、近い市内までの地産地消を始めた。といっても車でぶっ飛ばして10時間かかる。東京から青森ぐらいまでの距離なら近いという感覚がある。日本には、都市と農村のきわめて近い時間・距離。多様な担い手による多様な農業がある。日本にいると生産者と消費者の距離が近い。半日で行けないところはないのが当たり前だが、生産者と消費者の近い距離はアドバンテージ。

あと日本には優れた景観がある。今、まさにインバウンド（訪日外国人旅行・訪日旅行）が話題になっている。日本は水が豊富。日本の財産。台湾の友人が観光に来て、行きたいのは日本の農村。台湾の農政は日本以上に近代化志向が強く、中山間地域の耕作放棄が進んで荒廃地になっている。日本はまだ農村がとても綺麗で、水が豊富だと感激して帰って行く。観光地には行かない。日本にとってのアドバンテージ。日本の地域性、消費者につないで、地域コミュニティがあって、担い手も循環させる。日本には日本にしかない、日本でしかできない農業の形があるはずだ。

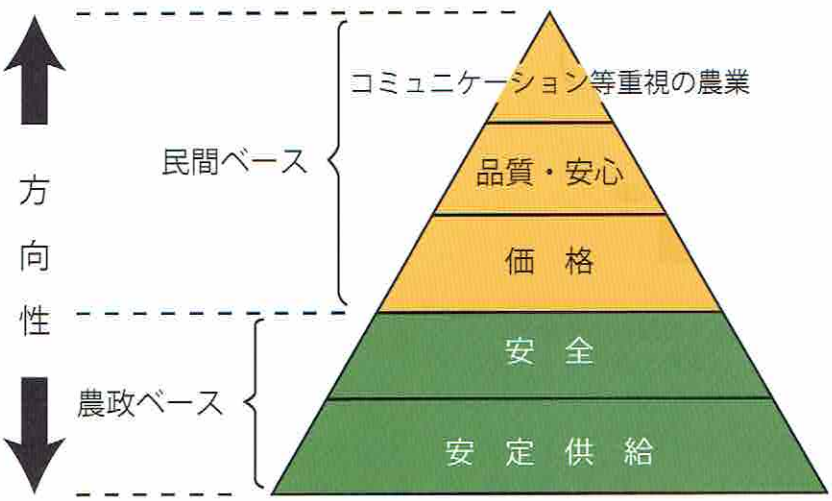


図3　農業（農産物）の諸要素と方向性
〔資料：蔦谷栄一作成〕

(3) 地域社会農業―地域循環、地域社会との一体化

図3は農業の諸要素を私の独断と偏見で5つに分けて示した。一番下は安定供給、一定量飢えないように供給していく。安全、食べ物だから。そして価格、その上が品質・安心。ベクトル（方向性）は二つに分けて書いてある。下向きのベクトルは土地利用型農業、特に水田稲作や穀類を中心とした畑作になる。要は、日本農業には価格競争力がないが、食料の安全保障上一定の生産が必要だ、ということになれば、国の補助金をも

らって経営をなんとか帳尻をあわせるという、やり方が一つある。もう一つは上向きの矢印。価格競争力がないとすれば、ベクトルは品質、有機などの安全で勝負していく。その上にコミュニケーションを重視していく農業がある。これは生産者と消費者の顔が見える関係、あるいは景観、あるいは食文化なり伝承なりの諸々を含んでいる。市場原理でやるのであれば、日本のもう一つの道は上の方向、多くがそこに進んでいる。ただ農政の動きとは一致していない。この上と下のベクトルをどう組み合わせていくかが地域農業の課題。うまく組み合わせて設計していくというイメージが必要だ。

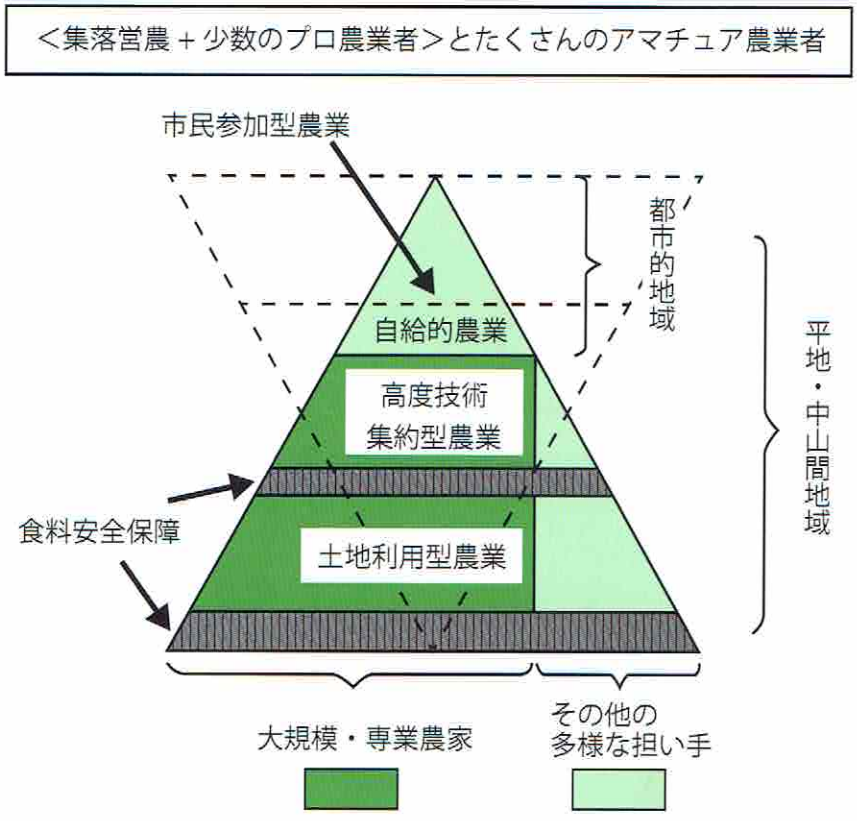


図４　多様な担い手・多様な農業による地域農業
（注）実線による三角形は面積ベース、点線によるそれは担い手数ベース
〔資料：蔦谷栄一作成〕

(4) コミュニティ農業―人間と人間、自然と人間との関係

もう一つの図（図４）、ベースに土地利用型農業があり、その上に高度技術集約型農業、品質なり安心の農業、その上に自給的農業、あるいは市民参画型農業がある。その三角形は面積を表す。注目して欲しいのは逆三角形で人口のイメージを表しているということ。たくさんの人たちがわずかの面積だが農業に参画していく。その組み合わせをそれぞれの地域でつくっていくのが課題になる。農業の担い手というと、プロ農家だけで語られているが、これからはアマチュアを含めて、人口の環流（かんりゅう）を促していくというイメージだ。そのベースは地域農業。地域農業を設計していく。地域社会との一体化、コミュニティ農業となる。コミュニティは何の関係でできているのか。その関係性を強化していく要件は以下の三つである。

①人と人との関係（都市と農村、産消提携、ＣＳＡ）
②人と自然の関係（自然に負荷をかけない環境にやさしい農業）
③自然と自然との関係（人間がコントロールできない）

地域社会農業としてコミュニティ農業の上に地域での循環を作っていく。循環を含めた農業を打ち出していく。地域社会農業は吉田喜一郎さんが打ち出した概念。生産者と消費者、あるいは一般市民を含めた、循環をつくっていく農業の方向。

農の世界がもつ社会デザイン能力（農業の周辺）

プロ農家の周辺を考えていこう。農の持つ社会デザイン能力が農的社会の創造力となる（図５）。農の世界が備えているのは工業原理ではなく生命原理を生かしていく６つの力である。①食料自給能力、②自立能力、③コミュニティ形成能力、④教育能力、⑤生きがい・働きがい実感能力、⑥文化形成能力。食料自給能力は自分、家族、地域の話、自給率というと国の話になる。自立能力（経済性）というのは、今、労働力を売る、市場経済から逃れられないことを自覚し、自分なりの立場で自立する力を持つ必要がある。そして、コミュ

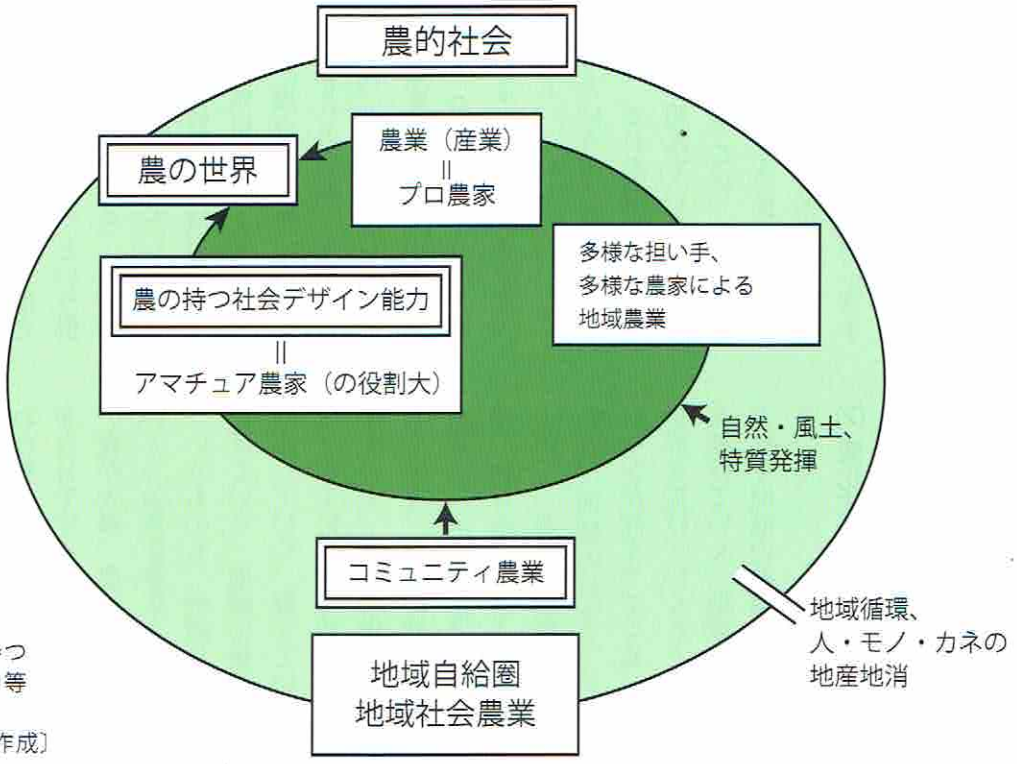


図５　農的社会、農の持つ社会デザイン能力等関係図
〔資料：蔦谷栄一作成〕

ニティ形成能力。支え合って生きていく。いっしょに農作業、協同作業、飲みながらコミュニティを再生させる。そうして、教育能力を生かす。今、足りないのは自然との関係。経験を持てないこと。自分が生まれ育った時と違い、今では皆管理されていて空き地がない。空間がない。かろうじて農業に残されている。そこで取り組まれるのが農業体験。でも農家の人が段取りして「さあ、植えてくれ」は体験じゃない。農業は段取りが大変で、雑草をとったり、後かたづけ、調理をしたり、全体をやって初めて判るところがある。

日本人が海外に負けているなと思った経験がいっぱいある。北欧の保育園に行くと、外に乳母車が置いてある。乳母車で森へ行ってお昼寝する。雪が降っても関係なくやる。マイナス10℃以下では外出しないが、要するに子どもは自然にさらさないと駄目だということ。周りは沼地がいっぱいあるが、沼地に囲いはない。落ちて沈んだら這い上がってこい。自己責任だという。嘘か本当か、みんな這い上がる時に使うスパイダーマンの爪のようなものを持っているという。夏に水温15～16℃でも平気で泳ぎ、サウナに入る。ノルウェーでは西側に海が見える土地の値段は高い。なぜなら、家に帰って、泳いでサウナに入って、ワインを飲みながら夕日が沈むのを見るのが一番の幸せ。そういう所は地価が高い。多くの人の価値観。21世紀の本当の幸せは金ではなく、価値観の問題。

今の農業は、虐殺農業といっている人もいる。大農機具の応接室のような運転席で、カーステレオをガンガンかけて、オペレーションだけやっている。土に触れて土の感触、水分とか生物とか、今日はこういう雲が出ているから雨だとか、人間の五感の基本、美的感覚のベース、今の農業はそういうものを養わない。農業をやる人も農的世界をしっかり理解して、自分で味あわないといけない。経験をベースとした教育、バーチャルでない本物に触れることが大事。

生きがい、働きがい、実感能力、農の社会変革能力。今の若い人は仕事が嫌いで可哀想だ。収入を得るためにはしょうがないと言う。仕事が面白く、仕事が好きだからこそエネルギーがでるというのが一番いい状態。せめて半農半X。嫌な仕事は少しにして、やりがいのある農に求める。農をやることによって、ある程度アプローチできる。文化形成能力は、あらためていうまでもない。農業だけに限らないが、農業をやることによっていろんな能力を、生きがいであると同時に、みんなが実感することで一人一人が変わる。みんなが変わると社会が変わる。そういう意味では、非常に大きい能力、怖い能力を秘めているのが農の世界。

変革の先にあるもの

(1) 農的社会の一つの到達点「地域自給圏」

キーワードは自給・自立、協同・共生・コミュニティづくり、協同の再生、協同組合の新しい形。生きがい、働きがいを「協同労働」という働き方に変えること。私が考えるのは、百姓という生き方、国民皆農を地域自給に生かす地域自給圏、それが一つの到達点。内橋克人さんは「FEC自給圏」※を唱えていて、すごく共感できる。食料（Food）、再生可能エネルギー（Energy）、介護・医療（Care）の頭文字をとってFEC、これらを自給していこうという考え方がFEC自給圏。これを長期計画に入れて取り組んでいる生協もある。私はそこに、Education（教育）、Environment（環境）、Culture（文化）、Cure（医療・健康）も農業に含まれる能力として、F3E3C（Food + Energy, Education, Environment + Care, Culture, Cure）まで広げて考えたい。

特に個人的にはCureを入れたい。人間の健康。個人が守る。自分で守る。民間療法が非常に発達してきており、予防医学がそれなりに検証され存在している。自分の健康を自分で守る。その時に、いい食が大事。農に結びつけていく。EducationやCureこういうものも、地域自給につなげていく。地域に循環を生み出していく。促していくにはマネーに対する依存度を下げていく。贈与の世界を増やしていく。異常に肥大した現金経済への依存度を引き下げ、物々交換をすることによって、お互いの気持ちを通わせ、地域のコミュニケーションが深まってくる。農の世界を拡げていくことで自給を拡げていく。地域の自立能力なり地域の循環を可能にしていく。

(2) 変化する潮流

今、日本でも都市農業振興基本法が成立し、田園回帰現象が発生している。世界的にもその動きが出ている。もちろん、ヨーロッパのクラインガルテン。最近めざましいのが、台湾、中国の沿岸部、韓国、我々のごく近い所でも盛んに都市農業を通じての交流が進んでいる。そういう意味で、東アジア型農業が一つのモデルになるのか。都市農業も含めた地域農業、一般市民を含めた多様な担い手。小さい動きかもしれないが地域農業に出てきている。

もう一つが『アナスタシア』、ロシアで出ている本。全部で5巻出ている。もっとあって翻訳が進んでいるようだ。ウラミジール・メグレの彼の実体験がベースになって書かれた本。ロシアの海岸地帯に沿って進んで行って森に棲むアナスタシアと出会う。ほとんど自給生活。一晩の短い経験。彼女と交わした話。経験を通じて感じたことを綴った本。今の現代文明は遅れている。これからの世界は自給自足、いってみれば人間の能力が研ぎ澄まされ発揮されたときに、今の能力を超えた次の世界へ。一周遅れて、最先端に。今の機械なり文明なりが、人間の持っている能力の発揮を妨げている。考えさせられる良い本。世界中で一千何百万部売れている。今、農業なり自給なりを見直す動きが、澎湃（ほうはい）としていろんな所に芽生えている。21世紀の一つのイメージに近い動きが少しずつでてきている。

もうける経済から分かち合う経済、与える経済へ、贈与の世界の回復を考える時代を迎えている。ロシアにはダーチャという仕組みがある。都市住民が平均すると600㎡の週末簡単に泊まれるくらいの小屋付き農地で、週末になると自分達でダーチャで食べものをつくる。食料事情がよくなった最近ではお花をつくるものも多い。ソ連が崩壊してロシアになる時は、ダーチャで主食のじゃがいもの90％以上が生産されたというデータがある。CSAのもう一つ先にくる、国民皆農になった時のイメージがダーチャ。アナスタシアにも次の文章がある。「ダーチュニク（ダーチャを利用している人たち）が人々を飢餓から救い、人々の魂に良き種を蒔き、未来の社会を育てている。」「ダーチャの菜園で土いじりをするととても気分がよくなって、そのおかげで多く

蔦谷氏を招いて行われた、当センター職員向けセミナー

の人が健康になり、長生きしてきたし、心も穏やかになる。技術優先主義で突き進む道がいかに破滅的かを社会に納得させる、その手助けをするのがダーチュニク。」

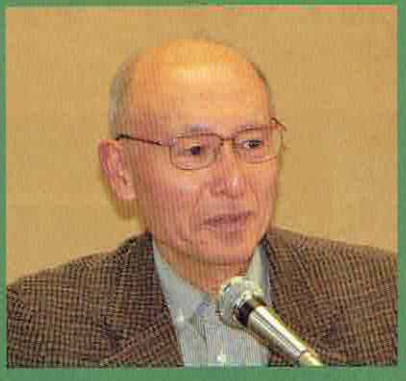
(3) 農的社会創造の要件

農的社会をつくるのに何が必要で何が要らないのか。必要な一つは「協同の時代」でないかと感じている。協同組合だから協同というわけではない。協同とはコミュニティ。みんなで一緒に生きていく。一緒にやっていく時代にきているのではないか。当たり前のことが当たり前にできること。私には別の意味での協同組合に対する批判がある。今の協同組合がなぜ、値段、価格、経済とは違う機能創出ができないのか。なぜ、新しいコミュニティづくりの活動ができないのかということ。

あらためて、へーと思っている、ワーカーズコープという仕組み、世界がある。これは労働者協同組合のこと。今の農協にしても生協にしても組合員になることによって、サービスを受けるのが組合と組合員の関係。共同購入で大量に安く仕入れて、ある程度適正な値段で販売する。ワーカーズコープはだいぶ違う。自分たちが組合をつくって自分たちで出資して、自分たちが労働し経営するのがワーカーズコープ。どうも、これからの主流となりうる一つの組織、産業としての農業、そのベースに農がある。このバランスを可能にする組織が必要で、それがワーカーズコープではないか。私はまだ確信するまでにいたっていないが、その思いを強くしている。自分たちが働いて、自分たちで責任を持って成果を分配する。レイドローという人がいて、これは世界協同組合学会の会長で、1980年代モスクワで、協同組合の世界大会が開かれた。レイドローが中心となって『西暦2000年に向けての協同組合』という報告書を出している。彼がこれからの協同組合の課題として挙げた六つの中で、特に二つの事が私の目にとまった。①地域のための協同組合が何をやるか。②協同労働の再評価。協同労働とはワーカーズコープ。要するに自分たちが労働者である協同組合、それが必要な時代になっている。西暦2000年に向け1980年に言い出した。これはすごい見識だと思う。

もう一つ、グローバル化にはグローバル化で対抗するべきでない。グローバル化にはローカル化で対抗する。今の農業政策を政党政治で変えていくのではなくて、例えば足下でプランターでもやって、地域から変えて世界をつくっていく。地域からの実践・変革の積み上げ、これが現実的だ。それをネットワークでつないでいく。そこに21世紀の特性がある。それができる時代。ネットをつなぐことでグローバル化は可能、ネットワークがローカル化によるグローバル化への対抗軸となる。ローカルの発想でグローバルを動かしていく、そういうことが必要。そういうことをしないと人間の疎外がカバーできない。そこまで追い込まれている。いろいろ聞くと私の考えていることは、時代をさかのぼって岡田茂吉先生が言っていることと本質的に同じではないかと感じている。

※「FEC 自給圏」 http://www.nhk.or.jp/chiiki-blog/900/241791.html



蔦谷（つたや）　栄一（えいいち）

昭和23年生まれ。農林中央金庫で25年、農林中金総合研究所で18年。有機農業推進法、飼料米、米粉、バイオマス、放牧、都市農業振興基本法など数多くの政策に関する提言を行ってきた。西東京市と山梨市牧丘町を拠点にして、「農的社会デザイン研究所」を立ち上げ、伊那市高遠町やいすみ市でも活動を続ける。
小山内健康法、和笛、週末農業などが生活の生きがい（三つのモチベーション）。

『農的社会をひらく』
（蔦谷栄一著　創森社　2016年）